

特別支援学級に在籍する学齢児のメンタルヘルス， 日常生活スキル，人間関係に関する実態調査

日戸 由刈*

Mental health, daily living skills, relations with peer and adult at school-aged children in special education class

Yukari NITTO*

【要旨】

特別支援教育関連のセミナーに参加した保護者 192 名を対象に，小学校期から中学校期における子どものメンタルヘルス，日常生活スキル，人間関係に関するアンケート調査を行った。対象を子どもの在籍級に沿って特別支援学級群 91 名，通常学級群 101 名に分け，小学 1-3 年，小学 4-6 年，中学 1-3 年の時期ごとに横断的検討を行った。結果，通常学級群では全時期を通してメンタルヘルスの問題を呈する割合が相対的に高く，中学校期は 65% にみられた。身辺自立に意欲的に取り組む割合，困ったときに家族以外の大人（教師など）に相談する割合は低かった。一方，特別支援学級群ではメンタルヘルスが良好な割合が全時期を通じて 80% 以上であり，身辺自立に意欲的に取り組む割合，困ったときに家族以外の大人に相談する割合も高かった。ただし，中学校期では，学校以外での仲間・友人関係や地域での活動に意欲を示す割合が低く，成人期に向けた社会参加のための支援の強化が課題と考えられた。

キーワード：発達障害，メンタルヘルス，日常生活スキル，仲間・友人関係

1. 問題の所在と目的

近年，発達障害の人たちのメンタルヘルスの問題への関心が高まっている。発達障害の多くは自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder；ASD）の特性，すなわち社会性コミュニケーションの質的異常および反復的行動・こだわり・感覚異常を併せ持つ。それゆえ物事の感じ方・認識の仕方が定型発達の人たちと異なる場合が少なくない。

発達障害の人たちがこうした周囲との違いに気づき，悩み始めるのは，いつの時期からであろうか。日戸・藤野（2017）は，ASD の友人関係について

文献考察を行った。その結果，知的障害を伴わない ASD を対象とした先行研究では，小学校低学年の時期には周囲との違いをほとんど気にせず，小学校高学年から中学校期の時期にかけて，気づきや悩みがみられ始めることが多かった。そして青年期には，多くが孤独を感じ，不安や抑うつを訴えていた。

一方，知的障害を伴う ASD を対象とした先行研究では，青年期になっても知的障害や発達障害の仲間と余暇を共に楽しむなど，メンタルヘルスの問題はほとんど指摘されていなかった。知的障害を伴う人たちは，本人の能力や特性に合った特別な教育環

* にと ゆかり 相模女子大学人間社会学部人間心理学科

境に所属し、そこで対等な仲間関係を経験する。このような教育的処遇の違いは、メンタルヘルスや日常生活スキルへの意欲、人間関係の持ち方などに影響を及ぼすのではない。

この仮説を検証するため、研究では小学校期から中学校期における特別支援学級および通常学級に在籍する子どものメンタルヘルス、日常生活スキルへの意欲、人間関係の持ち方に関する実態調査を、保護者へのアンケートを通じて行った。

2. 対象と方法

2.1 調査対象

X年にA市で開催された保護者対象の特別支援教育関連セミナーに参加した286名。このセミナーは参加費が無料であり、市内の全小・中学校を通じて保護者に周知された。筆者は講師をつとめた。

調査の実施にあたっては、事前にセミナーの企画責任者の許可、および相模女子大学倫理審査委員会の承認を得ている。

2.2 実施方法

セミナーの開始時に無記名式のアンケートを配付し、冒頭で筆者が調査への協力依頼の説明を行った。説明ではアンケートへの回答は任意であることを伝え、終了時に出口にて回収を行った。

2.3 調査項目

アンケートは次の4つの内容で構成した。

【基本情報】

学年・性別・特別支援教育の利用形態を選択。

【メンタルヘルス】

「毎日登校し、放課後や休日でも元気である」、「毎日登校するが、放課後や休日はつかれている／ストレスや悩みが多そうに見える」、「ほぼ毎日登校しぶり／月に数日の欠席・遅刻・早退」、「長期的に欠席／場面を限って参加」のいずれか1項目を選択。

【日常生活スキルへの意欲】

基本スキル（3項目）、学校生活（3項目）、家庭生活（3項目）、地域の居場所（2項目）の計11項目について、「4点：自分から意欲的に取り組む」、「3点：親に言われて問題なく取り組む」、「2点：親に言われてしぶしぶ取り組む」、「1点：やりたがらない／意欲関心が極めて低い」、の4件法で評定。

【人間関係の持ち方】

「お子さんの仲間・友人関係はどうですか？」、「お子さんは困ったとき誰に相談していますか？」、「ご家庭での保護者とお子さんの関係性はどうか

か？」という質問に対して、それぞれ「該当する」と思われる回答項目を選択（複数選択可）。

2.4 分析の手順

1) 分析対象の抽出：調査対象から、小学生または中学生、かつ通常の学校に所属という条件に基づき分析対象を抽出した。

2) 分析対象の分類：分析対象を「特別支援学級に在籍（以下、特別学級群）」「通常学級に在籍（以下、通常学級群）」の2群に分け、各群を「小1-3」（小学校前期と称す）、「小4-6」（小学校後期）、「中1-3」（中学校期）という3つの時期に細分類した。

3) 調査項目における相違点の記述：各調査項目における、6つのサブ群（在籍級×時期）の相違点を記述した。なお、本研究では割合の数値について、25%未満を「低い」、50%以上（半数以上）を「高い」と操作的に定義した。

3. 結果

3.1 分析対象

アンケートの回収率は74.1%（212名）であった。特別支援学校に在籍、または幼児期や高校期を含む同胞の情報が記載されていたアンケートを除外した結果、抽出された分析対象は192名（子どもの性別は男137、女55）であった。時期は小学校前期が85名、小学校後期が77名、中学校期が30名であった。

このうち特別学級群は91名（男67、女24）であり、教育形態の内訳は特別学級にのみ在籍73名、特別学級に在籍し通常学級への交流18名であった。通常学級群は101名（男70、女31）であり、教育形態の内訳は通常学級に在籍し通級指導教室で集団指導15名、通常学級に在籍し通級指導教室または特別支援教室にて個別指導18名、通常学級にのみ在籍68名であった。各サブ群の人数、男女数、教育形態の内訳を表1に示した。

3.2 メンタルヘルス

「毎日登校し、放課後や休日でも元気」に評定された場合を「メンタルヘルス良好」、他3項目に評定された場合を「メンタルヘルス非良好」と定義し、サブ群ごとの割合を表2に示した。

特別学級群では全時期を通して、メンタルヘルス良好な事例の割合は80%以上と高く、メンタルヘルス非良好な事例の割合は20%未満と低かった。

通常学級群では、小学校期前期・後期にメンタルヘルス良好な事例の割合は60%以上と高かったが、特別学級群と比べて相対的に低かった。また中学校

表1 分析対象（人数）

		特別支援学級に在籍			通常学級に在籍		
		小 1-3	小 4-6	中 1-3	小 1-3	小 4-6	中 1-3
人数		42	39	10	43	38	20
性別	M	34	28	5	28	26	16
	F	8	11	5	15	12	4
所属	特別支援学級のみ	31	32	10	—	—	—
	特別支援学級＋交流	11	7	0	—	—	—
	通常学級＋集団	—	—	—	9	5	1
	通常学級＋個別	—	—	—	8	4	6
	通常学級のみ	—	—	—	26	29	13

表2 メンタルヘルスに関して、該当項目を選択した割合（％）

		特別支援学級に在籍			通常学級に在籍		
		小 1-3	小 4-6	中 1-3	小 1-3	小 4-6	中 1-3
メンタルヘルス良好		83.3	87.2	100.0	69.8	65.8	35.0
メンタルヘルス非良好		16.7	12.8	0.0	30.2	34.2	65.0

太字下線：割合が高い 細字：割合が低い

期にメンタルヘルス良好な事例は35％であった。一方、メンタルヘルス非良好な事例の割合は、小学校前期・後期は25％以上50％未満の範囲であり、中学校期は65％と高かった。

3.3 日常生活スキルへの意欲

4領域11項目について、4件法での評定結果のうち「4点：自分から意欲的に取り組む」と評定された人数の割合（以下、意欲が高い割合と称す）、および「1点：やりたがらない／意欲関心が極めて低い」と評定された人数の割合（以下、意欲が低い割合）を、サブ群ごとに表3に示した。

1) 基本スキル

「**身辺自立**」：意欲が高い割合は、特別学級群では小学校前期・後期はいずれも25％以上50％未満の範囲であり、中学校期は70％と高かった。通常学級群は全時期を通して25％未満と低かった。

「**買い物・金銭管理**」・「**ひとりで外出移動**」：意欲が高い割合は、通常学級群はいずれの項目も中学校期に50％以上と高かった。特別学級群は「買い物・金銭管理」で小学校後期・中学校期にいずれも25％未満と低かった。

2) 学校生活

「**級友との関係**」・「**行事・クラブ活動**」：特別学級群では、意欲が高い割合は小学校前期・中学校期に50％以上と高く、意欲が低い割合は全時期を通して20％以下と低かった。通常学級群では小学校前期・後期に意欲が高い割合は50％以上と高く、意欲が低い割合は25％未満と低かったが、中学校期は意欲が高い割合も意欲が低い割合も25％以上50％未満の範囲であった。

「**勉強・宿題**」：特別学級群、通常学級群ともに、全時期を通して、意欲が高い割合、意欲が低い割合ともに概ね25％未満と低かった。ただし特別学級群の中学校期では意欲の高い割合が40％であった。

3) 家庭生活

「**家族との会話**」・「**ゲーム・ネット**」：特別学級群、通常学級群ともに、全時期を通して、意欲が高い割合が50％以上と高く、意欲が低い割合は10％未満と低かった。

「**家事手伝い**」：特別学級群、通常学級群ともに、全時期を通して、意欲が高い割合、意欲が低い割合ともに概ね25％未満と低かった。通常学級群の中

表 3 日常生活に関する各項目において、意欲が高い／意欲が低いと評定された割合（％）

		特別支援学級に在籍			通常学級に在籍			
	意欲	小 1-3	小 4-6	中 1-3		小 1-3	小 4-6	中 1-3
基本スキル								
身辺自立	高	31.0	33.3	70.0		20.9	13.2	15.0
	低	0.0	5.1	0.0		9.3	10.5	10.0
買い物・金銭管理	高	35.7	23.1	10.0		37.2	36.8	50.0
	低	11.9	25.6	30.0		7.0	13.2	15.0
ひとりで外出移動	高	23.8	33.3	40.0		46.5	47.4	60.0
	低	28.6	38.5	10.0		16.3	18.4	20.0
学校生活								
級友との関係	高	61.9	46.2	50.0		60.5	50.0	35.0
	低	4.8	15.4	0.0		9.3	21.1	25.0
行事・クラブ活動	高	54.8	46.2	60.0		58.1	71.1	45.0
	低	2.4	5.1	20.0		7.0	13.2	25.0
勉強・宿題	高	14.3	20.5	40.0		14.0	7.9	10.0
	低	4.8	12.8	20.0		9.3	26.3	15.0
家庭生活								
家族との会話	高	78.6	64.1	80.0		67.4	65.8	55.0
	低	0.0	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0
ゲーム・ネット	高	85.7	89.7	100.0		86.0	78.9	95.0
	低	4.8	7.7	0.0		7.0	0.0	0.0
家事手伝い	高	23.8	7.7	10.0		20.9	13.2	15.0
	低	9.5	10.3	20.0		16.3	23.7	40.0
地域の居場所								
級友以外の仲間	高	45.2	38.5	30.0		65.1	52.6	40.0
	低	14.3	20.5	50.0		16.3	18.4	25.0
余暇サークル	高	40.5	30.8	10.0		51.2	44.7	20.0
	低	11.9	15.4	60.0		20.9	18.4	25.0

太字下線：割合が高い 細字：割合が低い

学校期は意欲の低い割合が 40％であった。

4) 地域の居場所

「級友以外の仲間」・「余暇サークル」：特別学級群では意欲が低い割合が小学校前期・後期は 25％未満と低く、中学校期は 50％以上と高かった。通常学級群では、小学校前期・後期は意欲が高い割合が概ね 50％以上と高く、意欲が低い割合は 25％未満と低かった。中学校期は意欲の高い割合、意欲の低い割合はいずれも概ね 25％以上 50％未満の範囲であった。

3.4 人間関係

人間関係に関する 3 つの質問について、それぞれの回答項目に該当すると回答した割合を、サブ群ご

とに表 4 に示した。

1) 「お子さんの仲間・友人関係はどうですか？」

・学校の教室でやりとりのできる仲間・友人がいると回答した割合：特別学級群は全時期を通して、通常学級群は小学校前期・後期は 80％以上と高かった。通常学級群の中学校期は 60％であった。

・教室外で気の合う仲間・友人がいると回答した割合：特別学級群では小学校後期・中学校期に 20％以下と低かった。通常学級群では中学校期に 50％と高かった。

・通級や放デイなどで知り合った気の合う仲間・友人がいると回答した割合：特別学級群では小学校前期・後期に 50％以上と高く、中学校期に 10％と低かった。通常学級群では全時期を通して 25％未満

表4 人間関係に関する質問について、各項目に該当すると回答した割合（複数回答可）（％）

	特別支援学級に在籍			通常学級に在籍		
	小 1-3	小 4-6	中 1-3	小 1-3	小 4-6	中 1-3
お子さんの仲間・友人関係はどうですか？						
学校に行けば教室にやりとりのできる仲間・友人がいる	88.1	87.2	90.0	90.7	86.8	60.0
教室に限定せず、共通の興味。趣味など気の合う仲間・友人がいる	28.6	17.9	20.0	46.5	39.5	50.0
通級や放デイなどで知り合った中に気の合う仲間・友人がいる	61.9	56.4	10.0	23.3	13.2	15.0
同世代に気の合う仲間・友人は少ない／ほとんどいない	19.0	33.3	50.0	18.6	21.1	25.0
お子さんは困ったとき誰に相談していますか？						
親や家族に相談することが多い	83.3	84.6	90.0	79.1	86.8	80.0
教師や支援員など家族以外の大人に相談することが多い	57.1	56.4	50.0	34.9	23.7	10.0
同世代の仲間・友人に相談することが多い	2.4	5.1	20.0	16.3	15.8	5.0
困ったとき、人に相談することは少ない／ほとんどない	31.0	28.2	30.0	32.6	34.2	35.0
ご家庭での保護者とお子さんの関係性はどうですか？						
保護者は子どもができることは自分でさせ、できないことを手伝う	71.4	74.4	60.0	58.1	60.5	45.0
保護者は命令や規制が多い	83.3	61.5	30.0	69.8	68.4	55.0
保護者は先回りしてやってあげることが多い	81.0	76.9	70.0	76.7	68.4	65.0
子どもは保護者に何でも話してくれる	40.5	41.0	70.0	48.8	44.7	30.0
子どもは保護者とのやりとりを回避する	9.5	12.8	20.0	14.0	21.1	30.0

太字下線：割合が高い 細字：割合が低い

と低かった。

・同世代に気の合う仲間・友人は少ない／ほとんどいないと回答した割合：特別学級群では小学校前期に19%と低く、中学校期に50%と高かった。通常学級群では小学校前期・後期に25%未満と低く、中学校期も25%であった。

2) 「お子さんは困ったとき誰に相談しますか？」

・親や家族に相談すると回答した割合：特別学級群、通常学級群ともに、全時期を通して概ね80%以上と高かった。

・教師や支援者など家族以外の大人に相談することが多いと回答した割合：特別学級群では全時期を通

して50%以上と高かった。通常学級群では小学校後期・中学校期に25%未満と低かった。

・同世代の仲間・友人に相談することが多いと回答した割合：特別学級群，通常学級群ともに，全時期を通して20%以下と低かった。

・困ったとき，相談することは少ない／ほとんどないと回答した割合：特別学級群，通常学級群ともに，全時期を通して25%以上50%未満の範囲であった。

3) 「ご家庭での保護者とお子さんの関係性は？」

・保護者は子どもができることは自分でさせ，できないことは手伝うと回答した割合：特別学級群では全時期を通して60%以上であり高かった。通常学級群は小学校前期・後期に50%以上と高かったが，中学校期は45%であった。

・保護者は命令や規制が多いと回答した割合：特別学級群では小学校前期・後期に60%以上と高く，中学校期は30%であった。通常学級群は全時期を通して50%以上と高かった。

・保護者は先回りをしてやってあげることが多いと回答した割合：特別学級群，通常学級群ともに，全時期を通して60%以上と高かった。

・子どもは保護者に何でも話してくれると回答した割合：特別学級群では中学校期に70%と高かった。通常学級群は全時期を通して25%以上50%未満の範囲であった。

・子どもは保護者とのやりとりを回避すると回答した割合：特別学級群では全時期を通して20%以下と低かった。通常学級群は小学校前期・後期に25%未満と低く，中学校期は30%であった。

4. 考察

本研究では，特別支援教育関連のセミナーに参加した保護者に対する間接的な実態調査を行った。通常学級群に関しては，通級指導や個別指導を利用する事例がみられ，通常学級のみで在籍した場合も，子どもの発達心配する保護者の割合が高かった可能性が考えられる。以下に，各群の概要をまとめる。

1) 特別支援学級に在籍する人たちの実態

特別学級群ではメンタルヘルスは良好な事例が全時期を通じて80%以上，身辺自立など自分のすべきことに意欲的に取り組む割合が高かった。

一方，買い物や金銭管理など地域生活に必要なスキルは，小学校後期，中学校期では，意欲的に取り組む割合が低くなる傾向が示された。また，中学校期に学校以外の仲間・友人と会うことや地域の居場

所に参加することへの意欲が乏しい事例が半数以上にみられた。以上より，特別学級群では学校に行けばやりとりのできる仲間・友人はいるが，年齢が高くなるほど，家庭や学校という枠組みを超えた活動や人間関係，居場所づくりに対する意欲が低くなり，同世代との関係が狭まりやすい傾向が示唆された。特別学級群では学齢期において成人期の社会参加に向けた支援の強化が課題と考えられる。

人間関係について，特別学級群では，困ったときは親や家族のみならず，学校の教師や支援者など家族以外の大人にも相談できる割合が高かったが，同世代の仲間・友人に相談できる事例は僅かであった。

保護者は，一貫して子どもができることは自分でさせ，できないことを手伝おうとする割合が高く，子どもの年齢が上がると命令や規制の割合が低くなった。また，中学校期に子どもが保護者に何でも話してくれる関係性の築けている割合が高かった。一方，子どもに対して「先回りをしてやってしまう」傾向が一貫して高いという課題もみられた。

2) 通常学級に在籍する人たちの実態と課題

通常学級群は，メンタルヘルスが非良好な事例が相対的に多く，中学校期には65%に疲れや欠席・遅刻・早退の目立つ状態が認められた。また，小学校期，中学校期いずれにおいても，身辺自立など自分のすべきことに意欲的に取り組む割合が一貫して低かった。

武部・藤野・日戸（2020）は，知的障害を伴わないASDの学齢児への調査から，不登校と適応行動尺度の「遊びと余暇」のスコアの関連性を指摘している。本研究でも，通常学級群では中学校期では買い物や金銭管理，ひとりで外出移動などに意欲を示す反面，地域の居場所への参加意欲は高くなかった。

仲間・友人関係について，通常学級群では学校での級友との関係には小学校期では意欲的であったが，中学校期では意欲が低下する傾向が示された。一方，特別学級群とは異なり，学校以外で気の合う仲間・友人を持つ者がどの時期にも一定数みられ，孤立する割合は高くはなかった。ただし，困ったときに同世代の仲間・友人に相談できる事例は，特別学級群と同じく僅かであった。

大人との関係について，保護者は中学校期でも規制や命令の割合が高く，子どもが保護者に何でも話せる関係性や，保護者が子どもを見守る関係性を築く割合が特別学級群よりも低かった。子どもは困ったときに親や家族に相談していたが，上記の関係性

を考えると、タイムリーな相談はできていなかった可能性が考えられる。また、子どもが家族以外に相談できる割合は低く、とくに中学校期に教師や支援者に相談している事例は僅かであった。

3) 本研究の限界

本研究では子どもの発達障害の診断や発達の偏りの有無を問わずアンケートを実施した。このため、通常学級群には発達障害または発達の偏りを示す児と定型発達児の両方の保護者が混在していた可能性が考えられる。また、特別学級群、通常学級群のともに中学生の保護者の対象数が少なかった。

以上から、今回の調査結果は一般的な傾向を反映できていない可能性が考えられる。対象選定の条件を厳密にした調査に基づく統計学的な検討が今後の

課題である。

文献

- ・ 武部正明・藤野博・日戸由刈（2020）：知的発達に遅れのない学齢期の自閉スペクトラム症児の適応行動の実態と関与する要因の検討：日常生活スキルの問題を中心に．学校教育学研究論集 41：45-55
- ・ 日戸由刈・藤野博（2017）：自閉スペクトラム障害児者の仲間・友人関係に関する研究動向と課題．東京学芸大学紀要，総合教育科学系Ⅱ，68：283-296

※本研究は JSPS 科研費（課題番号：19K02960）の助成を受けた。